

# 「アメリカ人作家」ベローの誕生

## — ソール・ベローの文学とアメリカ社会

坂口佳世子

The Birth of an American Writer, Bellow  
— Saul Bellow's Literature and American Society

SAKAGUCHI Kayoko

ソール・ベロー (Saul Bellow) ほどアメリカ社会をこれほどの長きにわたり、様々な視点から観察し、それを作品に描き続けている作家は数少ないであろう。ベローはロシア系ユダヤ人の息子として1915年にカナダのラシーヌで誕生し、九才のときに両親とともにシカゴにやって来た。十才のときにはすでに作家になりたいと思っており、ジャック・ロンドンやオー・ヘンリーを読み、その作風を真似ていた。高校卒業後、シカゴ大学に入学するが、作家志望の彼はそこでの教育はベストではないと考え、二年後、ノース・ウエスタン大学に移り、文化人類学を専攻、さらに作家になるために大学院の英語学科への進学を希望した。しかし、学科長のウィリアム・ブライアンにロシア系ユダヤ人の息子としてベローはアングロ・サクソンの伝統、英語に対する適切な「フィーリング」を持っていないであろうと拒絶され、再び文化人類学を専攻するが中退し、その後、ペスタロッチ・フローベル師範学校、ニューヨーク大学、シカゴ大学等で教鞭をとり、現在もボストン大学で教えつつ、作家活動を続けている。

ベローの作家活動において独特の視座を与えているのがまさにこの彼の経歴である。彼はユダヤ系移民として、大学教授として、また作家として、彼の作品のなかにはマージナル・マン、知識人、芸術家、コスモポリタンの立場からみたアメリカ社会が描かれ、いわゆる「マイノリティ」としての立場から見たアメリカ社会の裏側を垣間見させてくれる。彼は最近作の『ラヴェルスタイン』(Ravelstein, 2000) まで19作もの著作を出版しているが、特筆すべきは彼の長きにわたる、かつコンスタントな創作活動であろう。それゆえに我々は彼の作品を通して20世紀のアメリカ社会を概観することができるのである。そこで本稿においてはアメリカ社会を各年代ごとに概観し、それが彼の作品のなかになどのように投影されているかを検討し、さらにその過程を通して、彼の文学の独自性、および創作姿勢について考察したい。

1920年代のアメリカ社会はまさに未曾有の大景気を享受していた。大量生産、大量流通、大量消費という大衆文化の開花に必要な三大要素が満たされ、大衆消費社会が出現し、ラジオ

や様々な電気器具、自動車等の産業が成長し、アメリカ社会を繁栄へ導いた。この繁栄の基礎となり、その後の産業資本主義社会の基盤となったのがヘンリー・フォードの開発した大量生産方式、「フォード・システム」であり、また彼は高賃金、労働時間の短縮という、一見労働者にとっての福音とも言える労資共栄の精神、いわゆる「フォーディズム」を打ち出した。また、この大量生産の単純労働の担い手となったのは1890年代から1920年代の世紀転換期に大量にやって来た新移民達であり、彼らはヨーロッパの人口増加や貧困、また宗教的迫害から逃れるためにアメリカにやって来たのである。彼らは19世紀の西欧、北欧からの旧移民とは異なり、おもに南欧、東欧の出身であり、彼らの多くは英語を話すこともできず、手に職を持たず、宗教もカソリックやユダヤ教という、いわゆる「ワズプ社会」のアメリカでは明らかに差別されるべき人々であるが、ニュー・ヨークやシカゴ等の大都市で貧しい労働者としてアメリカの繁栄を支えるのである。

ベローの『オーギー・マーチの冒険』(The Adventures of Augie March, 1953)のなかにはこの20年代のラジオや自動車や様々な物質にあふれるアメリカ社会を背景として、シカゴの移民達の姿が描かれており、ロシア系ユダヤ人移民の息子として1924年、9才でシカゴにやって来たベロー自身の体験をもとに、この都会に住む移民達の生活が生き生きと描かれ、移民達の力強さや逞しさが表現されている。

この20年代の豊かさから一転して、30年代のアメリカ社会は1929年のニュー・ヨークの株式取引所の株価の大暴落によって引き起こされた大恐慌のために、資本主義の危機とも言わなければならない時代となる。この大恐慌のあおりを最も強く受けたのが社会の弱者である、貧しく、社会保障に守られていない労働者達であった。33年当時の失業者は1200万人とも1300万人とも言われ、全国に溢れていた。この大恐慌の原因は富の不分配による、生産と消費のギャップ、また株に対する不健全な投資や政府の経済政策の未熟さとも言われているが、この大恐慌によって、20年代の豊かさゆえに強く浮き彫りにされるのが国民に与えられているはずの「自由、平等、幸福の追及という不可譲の権利」という建国の理念に関する歴史的矛盾である。すなわち、階級間の富の格差であり、「二つの国」アメリカの存在である。

『オーギー・マーチの冒険』のなかにはアメリカ社会における、この「光と影」のコントラストが如実に描かれており、アメリカの政治の各階級に対する差別的対応やアップトン・シンクレアの「ジャングル」的社會、すなわち弱肉強食のアメリカ社会の認識へ我々を導いてくれる。さらにテクノロジーの発展に伴う高度管理化社会の出現もこの作品のなかでは予言されている。また、ベローの第三作目のこの作品に関しては、しばしば作風の変化、すなわちその自由で軽妙な「語り口」が作風の特徴として指摘されているが、さらに特筆すべきは彼の創作における視座の確立であり、それは恐らく『ハックルベリー・フィンの冒険』のもじりであろうと思われるこのタイトルが示唆している。マーク・トウェインが当時の黒人差別社会をマージナル・マンの子供の目を通して描き出したように、ベローは20年代、30年代のアメリカ社会をユダヤ系移民というマージナルマンの目から描き出し、社会の矛盾を指摘している。

30年代のこの大不況のなか、ローズヴェルト大統領が「資本主義の左旋回」ともいわれるニュー・ディール政策をもとにアメリカ社会、一般大衆の救済に努めるが、結果的に経済の完全復活に導くのは第二次世界大戦の勃発、参戦に伴う軍事費の増大であり、軍需産業の急成長

であった。周知のとおり、アメリカは1941年12月7日の日本軍の真珠湾の奇襲攻撃をきっかけに参戦を決意するが、この参戦に関してはアメリカの孤立主義と国際主義の間での葛藤があった。第二次世界大戦が勃発したとき、アメリカはいち早く中立を宣言し、不介入の立場を表明した。パリ不戦条約の破綻、大恐慌による国内問題の深刻化、社会的危機感、民主主義を守るための第一次大戦への参戦が望ましい結果をもたらさなかったことや第一次大戦参加が軍需産業の画策によるものであるとする報告書の発表によるものと反戦気運との融合により世論は参戦反対の立場を強くしており、政府は20年代のウィルソン国際主義から一転して孤立主義的傾向を強め、モンロー・ドクトリン当時の善隣外交を推し進め、中南米諸国との共同防衛策を採っていた。しかし国民や特にローズヴェルト大統領自身は日独伊を初めとする世界のファシズム勢力にたいしては戦わなければならないという気持は強く、連合国側にたいする武器援助という形でその姿勢を表明していた。この反戦と国際平和のための参戦との間で揺れるアメリカに参戦を決意させたのが皮肉にも真珠湾攻撃であった。

このアメリカの戦争と孤立主義的平和との間での葛藤は『宙ぶらりんの男』(Dangling Man, 1944)のなかで象徴的に描き出されている。主人公のユダヤ系の若者、ジョウゼフ(Joseph)は徴兵検査に合格し、会社を辞め、研究も諦め、ひたすら召集札状を待っているが彼がカナダ国籍であることになかなか令状が届かず、宙ぶらりんの状況にある。彼は仕事もせず、妻に養われ、また仲間が国際平和のために戦っているなか、一種の罪悪感を感じつつ、食事のとき以外は外出せず、ひとり部屋にこもり、孤立していた。しかし彼にとって社会参加は「善は社会のなかで愛をもって達成される」と明言しているように、「完全なる自己」になるためには不可欠な要素であり、それゆえに現在の自己は墮落した状況であると感じていた。以前の彼は「善良なる人間はいかに生きるべきか」という問いにたいして「規約により、怨恨、暴虐、残虐が禁じられている集団」、すなわち「精神の植民地」なるものの建設という計画にその答えを見出していたが、今はその計画の無効性を認識していた。しかし最終的に彼の宙ぶらりんの状況に終止符を打ったのは銀行で自己証明ができず、「移民か黒人か子供」のように名前と呼ばれたことで著しくプライドを傷つけられるという出来事であった。このあと彼は現在の自由を放棄するという自己犠牲を払い、死の恐怖を払い除け、戦争という暴力に自己志願という最も望ましくない形で参加する決意をする。この選択は様々な問題を抱えつつも、国際社会の一員として世界の平和のために参戦を決意したアメリカの選択と相通ずるものがある。しかし両者ともに自己のプライドを傷つけられ、自らに降りかかってきた火の粉がその決断をさせたというのも皮肉な観があり、自己に直接関わってこない問題に対する、人間の消極的対応の姿勢を垣間見ることができる。

ベローはこの第一作目でユダヤ系移民のジョウゼフのなかにあるコンプレックスを示唆しつつ、結果的には内省のなかで答えを見出すべきという姿勢を捨て、行動のすることで現在の閉塞状況を打破するという、フロンティア精神、いわゆるヘミングウェイ的姿勢を選択し、アメリカ社会に同化しようとする姿勢を提示し、アメリカ人作家としてスタートを切ろうとしている。さらに、同じく40年代に書かれた『犠牲者』(The Victim, 1947)なかではアメリカにおける反ユダヤ主義の実態を執拗に暴露しつつも、ユダヤ系移民の過剰な被害者意識を指摘し、真の犠牲者とはどのような人々であるかという問いにたいして普遍的解答を提示している。

ジョウゼフが「移民か子供か黒人でも呼ぶように」姓ではなく名前と呼ばれたことで理性を失ってしまったことから分かるように人種差別の問題は移民の国、多民族国家メリ

カの建国以来の歴史的問題である。確かに『犠牲者』のなかには反ユダヤ主義が明確に描かれているが、人間のなかにある普遍的差別本能が示唆されている。すなわちワズブはそれ以外の南欧系、東欧系の人々を差別し、イタリア人はユダヤ人を差別している。黒人はその色の黒さゆえに差別の対象となりやすいのは明確である。ベローはユダヤ系移民として特にこの問題に関しては強い関心を示しており、これが彼のマイノリティとしてのアウトサイダー的マージナル・マンの視座を作りあげている。

前述のごとく、この作品のなかには反ユダヤ主義を反映する多くの場面があり、一見そのテーマが反ユダヤ主義の感があるが、ベロー自身はそれにたいして「移民、アメリカ社会に帰属したいと思っても受け入れられず、閉め出されている人々、我々すべてのなかのアウトサイダー」について語っているという。この作品は主人公のユダヤ人レヴェンサル (Leventhal) とワズブのオールビー (Albee) との関係から人間は被害者であると同時に知らないうちに加害者にもなっているという普遍的テーマを扱っているとも言われているが、ベローはこのなかでさらに、真の犠牲者とはどのような人々であるかという問題を提起し、子供やアウトサイダーや何らかの理由で社会から排除されている人、すなわち体制内で自己の主張を明確にできない人々こそ真の犠牲者であるといい、アメリカ社会に限らず、人間社会の普遍的構図を明らかにしている。

ただ、ベローは女性にたいする差別に関しては言及していないが、この作品のなかには明確に女性にたいする差別が表われている。レヴェンサルは二人の男性のまえで恐怖のために声を失っている女性を遠くから目撃し、この女性を一方の男性の妻であり、「娼婦」であると決めつけたり、婚約時代に現在の妻とかつての恋人との関係を疑い、偶然とはいえ暴力行為をしてしまい、彼女から言葉を奪ってしまったり、オールビーの連れ込んだ娼婦を、全く似ていないにもかかわらず、当時「娼婦」のレットルを張られていたプエルト・リコ人女性である管理人の妻と勘違いするなど、女性差別意識が明確に確認できる。彼女たちこそ、実際的にもまた「語り」の上からも男性の暴力により言葉を奪われ、釈明や自己主張をすることができない「真の犠牲者」である。これは当時のアメリカだけではなく、多くの父権社会に見られる女性差別の状況を反映しており、差別を告発しているはずのベロー自身が男性として無意識のうちに差別する立場に立っているといえよう。

50年代のアメリカ社会は「豊かさの時代」といわれ、大量生産技術の発展およびGNPの上昇により、大衆消費社会が到来し、テレビや自動車等の幅広い普及により、多くの人々が物質的豊かさとともに、娯楽やレジャーを楽しんだ。中産階級の人々は都会の喧騒を避け、郊外の一戸建てに移り住み、電化製品に囲まれた快適な生活を享受した。しかしこの豊かさを支えていたのは自動車、住居、電化製品などの需要増加に伴う産業の発展に加えて、連邦政府の予算の50-60パーセントを占める軍事費による原子力、航空機、ミサイル、電子機器など、新興軍需産業の発展である。周知のごとく、この「軍産複合体」は第二次世界大戦から現在まで様々な意味でアメリカの政治に影響を及ぼしている。しかし、この新興産業の発展はGNPの40年代の595ドルから60年の2263ドルへの急上昇につながり、就業率の安定にも貢献したのは確かである。この経済的安定は大恐慌時代を体験した人々にとっては非常に魅力があり、決して手放したくないものであった。それゆえ彼らは現体制の維持を望み、いわゆる「体制順応型社会」を生み出し、対外的には冷戦、朝鮮戦争、インドシナ問題等、様々な問題

を抱えていたが国内的には保守的気運が高まり、比較的安定した時代であった。

しかし、白人中産階級の郊外での豊かな生活とは対照的に都市中心部の黒人を初めとするマイノリティの人々の貧困というアメリカの「光と影」が再び浮き彫りになり、アメリカ社会の不平等が明確になった。南部の農業労働人口の削減により、北東部や西部の大都市に移り住んだ黒人たちは都市中心部で貧しい下層社会を構成し、これにより、アメリカの大都市は様々な都市問題を抱えることになり、時代とともにそれは深刻化している。

また、50年代は一見安定した時代ではあったが激動の60年代を予見させる歴史的事件もあった。人種問題に関しては戦争や大都市で白人との生活を体験した黒人たちは彼らの置かれている人種隔離状況に疑問を感じ始め、これは1954年の最高裁の公立学校での人種隔離を違憲とするブラウン判決や、55年のアラバマ州の「バスボイコット」事件につながり、60年代の公民権運動の指導者、キング牧師を登場させた。

また、効率と豊かさのみを追及する社会において、物質的豊かさと引き換えに、すぐ替え可能な一員として大規模な組織の一歯車として働くことを甘受している、画一化され、アイデンティティを失っている白人中産階級のライフスタイルにたいして最初に疑問を投げ掛けたのは「ビート作家」達であり、文学の面からであった。彼らは60年代のカウンター・カルチャーの先駆けとなり、アレン・ギンズバークはヒッピー達の教祖的存在となる。

このような文学的気運をペローは『雨の王ヘンダソン』(Henderson the Rain King, 1959)のなかに反映させており、主人公ユージーン・ヘンダソン(Eugene Henderson)は、『老人と海』(The Old Man and the Sea, 1952)でアメリカの物質文明主義を批判しているヘミングウェイをほうふつさせる人物である。ペローはアフリカを舞台とするこの作品のなかで文明社会の非人間的、抑圧的状况を浮き彫りにし、さらにライオンの象徴的人物、ダーフ王(Dahfu)を登場させ、人々のなかの原始的、反抗精神を呼び覚まそうとしている。さらに彼はこの粗野な反抗精神をニュー・ヨークの移民の労働者のエネルギーと重ねあわせ、現在体制派であるワスプの多くの人々の先祖はイギリス国教会に反抗して新大陸にやって来た人々であること、圧政的イギリス本国に反抗して、独立を勝ち得たのは彼らの祖先であることを想起させ、西洋文明のなかで文化的マイノリティであるアメリカ人の反抗精神が、ワスプであるヘンダソンのなかに存在していることを示唆し、彼の反抗精神を呼び起こすことに成功している。またペローはこの作品のなかでアメリカ社会における、科学的テクノロジー信仰、西洋文明至上主義にたいしても疑問を投げかけ、様々な文明の価値観を認め、取り入れることの必要性を示唆している。これはユダヤ系をはじめ、マイノリティの人々の持つ文化を認めていくことであり、60年代以降のポスト・モダン社会における文化的多元主義を予知し、マイノリティの公民権運動の展開を予期している。

このような人種的マイノリティとしての視座は以前の作品のなかにも見られたものであるが、この作品に明確に見られるペローの創作姿勢はアメリカ社会における芸術家の立場である。物質主義的アメリカ社会においては生産に携わらず、物質的繁栄に寄与しない芸術家はいわゆるマージナル・マンであり、疎外された人々である。しかし、50年代の「ビート運動」が示しているように、彼らはマージナル・マンであるがゆえに体制社会の矛盾にたいして敏感であり、作品を通して社会にメッセージを送る役割を果たしている。前述のヘミングウェイが非文明社会を体験し西洋文明批判をしているように、またギンズバークを初めとして多くの人々が世界に飛び出し、様々な文化の価値を認識しているように、ペローはこの作品のなかで人種的マイ

ノリティとしての視座と彼の文化人類学の知識を生かしつつ、アメリカ社会を観察し、作品を通して社会にメッセージを送っており、その作家としての役割と意義を強く認識しているように思われる。

60年代のアメリカは社会改革の精神に燃えた、史上最年少のケネディ大統領の誕生という希望の幕開けから、68年のキング牧師の暗殺、69年のワシントン反戦大集会で幕を閉じるという、明から暗へのまさに激動の時代であった。社会的にはケネディ大統領のあとを継いだジョンソン大統領が人種問題、貧困問題、社会保障問題に取り組み、様々な改革が行なわれたが、後半になると、ベトナム戦争への本格的介入、泥沼化、それにたいする反戦運動、また新公民権法の成立は見たものの、黒人の暴動の頻発等で社会は騒然としていた。また黒人の解放運動を引き金に他のマイノリティの解放運動、女性の解放運動、学生運動も盛り上がりを見せた。若者たちの間からは50年代のビート運動の流れを汲む、既成の体制に反抗するカウンター・カルチャーが生れ、その象徴としてヒッピー達が登場した。

この60年代をベローは『サムラー氏の惑星』(Mr. Sammler's Planet, 1970)のなかで総括している。彼はサムラー氏という、第二次世界大戦直後にアメリカにやって来た70才代のユダヤ人の知識人を主人公として登場させ、これまでと異なり、完全な異邦人の眼でアメリカ社会を観察し、分析している。前作の『ハーツォグ』(Herzog, 1964)の主人公も知識人ではあるがハーツォグが内省的な人物であったのにたいし、サムラー氏は異邦人としてアメリカ社会から距離をおき、社会学的な、また歴史的な観点から冷静に観察、分析している。この作品のなかでベローは大都市ニュー・ヨークを背景として貧富の格差の激しいアメリカ社会、犯罪の多発する危険な大都市の実態を暴露しており、さらに60年代の様々な解放運動にたいするアイロニカルな見方を提示している。黒人解放運動の「ブラック・イズ・ビューティフル」の概念は黒人スリの犯罪、恐喝で汚されており、女性解放運動に伴う性的解放運動は、性的な放蕩さゆえに周囲からひんしゅくを買っている高等教育を受けた、上流社会の女性の登場で歪曲され、アメリカ社会の性的に墮落した状況の原因ともされている。さらに親世代の既成の価値観に対抗するカウンター・カルチャーの精神は親の経済力をあてにしつつ、親に反抗している若者のなかに「生かされ」ており、また、フリー・スピーチを掲げる学生運動は集会における暴言や運動家達の知識レベルの低さが暴露され、付け焼き刃の学生運動の底の浅さを指摘している。

このような60年代の状況を見て、サムラー氏はアメリカは崩壊寸前の終末的状况であるといっているが、これにたいしてアメリカの力強さを熟知しているベローは、この作品のなかで宇宙開発のテーマを取り入れて独自の観点を示唆している。つまり、この終末状況を打開してくれるのが宇宙開発計画に象徴されているアメリカの高度テクノロジーと富である。69年にアポロ11号は人類史上初の月面着陸に成功し、アメリカは世界にその経済力、技術力を見せつけたが、この作品のなかで、このニュー・フロンティアの意義をアメリカの歴史におけるフロンティアの意義と重ねあわせてとうとうと語っているのは皮肉にもインド人科学者である。つまり、アメリカには西部というフロンティア、すなわちアメリカン・ドリームの基盤があったからこそ東部の労働者の不満の捌け口となり、革命が起きなかったといい、アポロ計画のために社会福祉予算が削減されているという批判にたいしても、その意義の大きさゆえに擁護する意見を述べている。ここで示唆されていることは、黒人暴動や貧困問題を含めて様々な問題

を抱えている現状を打開してくれるのはこのニュー・フロンティアが象徴しているテクノロジーであり、このテクノロジーの発展とテクノクラシーによってアメリカに経済的繁栄と社会的安定をもたらすことが可能であるとする、アメリカのテクノロジー至上主義である。また、インド人科学者の存在はアメリカの同化力と同時に、テクノロジー信仰が今や世界的規模のものであることも示唆している。これにたいしてサムラー氏は宇宙開発の意義をさほど認めず、現状を打破するためにはまず正義を取り戻すことが先決であるといい、テクノロジー信仰に疑問を投げかけている。

ベローはこの作品のなかに、ホロコーストを体験した老ユダヤ人サムラー氏を通して、様々なアウト・サイダーの視座を導入しているが、その適切な社会観察や分析にもかかわらず、難解で前作に比べて読者に受け入れにくい作品となっているのは否定できない。恐らく、その原因の一部は語りや構成、人物設定という小説の技巧にあるのではないかと思われる。

70年代のアメリカは建国200周年という記念すべき年を迎えたが、ウォーター・ゲート事件という大統領が任期途中で辞任するという、アメリカの歴史に大きな汚点を残す事件や、インフレや不況による増大する財政問題、またベトナム戦争による国際的威信や指導力の失墜等で一世紀前の百年祭とはうって変わり、沈滞ムードが漂っていた。社会的には60年代の公民権運動も一見鎮静化し、社会は落ち着きを取り戻したかのようにあったが、60年代からの都市問題はさらに悪化し、都市の貧困や治安の問題は深刻な状況に陥っていた。都市は50年代からの中産階級の郊外化からさらに黒人を初めとするマイノリティの人々によるスラム化が進み、また企業の周辺地域への移動による法人税の減収に加え、福祉費の増大により都市財政は危機的状況に陥っていた。実際、ニュー・ヨーク市は75年には連邦政府からの援助でかろうじて破産を免れた。さらに70年代以降、都市の犯罪は深刻な問題となっており、70年代の暴力犯罪の三分の一が大都市で起きており、その原因として挙げられるのは麻薬常習者の増加、銃器の入手の容易さ、警察力の慢性的不足などであるが、根本的要因は黒人やマイノリティの下層階級の高い失業率などの貧困問題である。

この都市の問題に関してはベローはまさに「アメリカの作家」といえるであろう。というのは彼の作品の背景の多くがニュー・ヨークやシカゴという二大都市であり、マイノリティの人々に焦点を当てているがゆえに、都市問題の深刻化が作品のなかに顕著に反映されているからである。例えば『サムラー氏の惑星』においてはニュー・ヨークの治安の悪さ、慢性的警察力の不足がリアリスティックに描かれており、問題の深刻さを訴えている。

ベローは次作の『フンボルトの贈り物』(Humboldt's Gift, 1975)のなかでも都市の問題をテーマの一つとして取り上げている。この作品の背景はシカゴであるが「シカゴ出身の作家」を自認する主人公チャーリー・シトリン(Charlie Citrine)は数年ぶりに故郷に帰り、愛するシカゴのあまりの荒廃ぶりに愕然とする。しかし彼は思い出の残るこのシカゴを今更見捨てることはできないと感じつつ、その再生の可能性を信じる。なぜならば、都市は個々の人々から構成されており、個人が変わっていないかぎりシカゴはいつかきつとかつてのシカゴに戻るであろうというのである。ベローはこの作品のなかでこの都市の問題を解決するのに未来に希望を託す、いわゆる「希望の弁証法」というユダヤ的問題解決法を提示している。これは現在は確かに最悪の状況であるが未来において必ず、かつての栄光を取り戻すであろうというユダヤ的発想であり、ベローはこの概念にたいして読者の関心を引くために作中にチャーリーのか

つての恋人ネイオミ・ルーツ (Naomi Rutz) を登場させ、旧約聖書の『ルツ記』のネイオミに注目させ、このユダヤ独特の概念の認識と理解を促している。

また、70年代には60年代の女性解放運動が進み、結果的には成立に必要な州の批准が得られず、成立は見なかったものの、連邦議会の両院で男女平等権修正条項が認められる等、女性の権利の拡張が進み、女性の政界や専門職への進出が目立った。その一方で、離婚率の急上昇や単身世帯の激増が目立ち、複数の男女や同性愛カップルの作る新しい家族形態が現われてくる。このような社会状況もまたこの作品になかには反映されており、結婚という伝統的社会形態に疑問を投げかけると同時に、強い女性に抑圧されているベローの主人公の姿が浮き彫りにされている。

このほか、彼の最高傑作であろうと目されるこのノーベル賞受賞作品のなかでベローは様々なテーマを取り扱っており、意義深いメッセージ送っているだけでなく、前作の失敗を省みて、読者を楽しませるエンターテインメントの要素を取り入れるべく、登場人物の設定に考慮し、さらに語りの技巧として入れこ構造を取り入れるなど、様々な構成上の努力を行なっている。なかでも注目すべきは喜劇の手法の導入であり、難解なテーマやメッセージを読者に抵抗感無く伝えるのに大きく貢献している。この喜劇の手法の導入にはアメリカの文化的に貧しい社会状況、すなわち物質的繁栄に貢献しない芸術家に対する無理解、社会に受け入れられないことからの彼らの絶望感が反映されていると同時に、もし作家その作品を通して社会にたいするメッセンジャーの役割を果たそうとするならば、大衆に広く受け入れられ、理解されなければならないというベローの認識が投影されており、「アメリカ人作家」としての彼の創作姿勢が表明されている。これは30年に渡る創作活動のすえ、ベローが辿り着いたアメリカにおける作家の存在意義に対する最終的結論であろう。

「強いアメリカ」の復活を掲げたレーガン大統領の就任で80年代のアメリカは幕を開ける。この強いアメリカの復活のための軍勢力増強のためにアメリカ経済は赤字財政に苦しめられ、その結果、老人医療費やその他の福祉政策の圧縮が行なわれた。このような財政方針は都市問題や貧困問題をさらに悪化させる要因となっている。70年代入って黒人の地位は確かに上昇し、黒人市長の急増に見られる様に政界への進出も顕著となり、また専門職、管理職への進出が目立ち、経済的状況も改善されてきた。しかし裕福な中産階級と極貧の「アンダー・クラス」と呼ばれる人々との分極も際立ってきたのも事実である。この黒人の貧困水準以下の家族の割合は80年代には全世界数の約30パーセントを占めており、白人の3.5倍である。

ベローは『学部長の12月』(The Dean's December, 1982)のなかでも前二作に引き続き、都市問題を取り扱っており、特に大都市の黒人下層階級の実態に焦点を当てている。ベローはこの作品のなかでシカゴの黒人社会の無秩序で、崩壊した、悲惨な状況を語ると同時に、その閉じられた自滅的状況を打開するための救済策を提示している。彼らの窮状の根本的要因はその「閉じ込め」状態と黒人社会内部のアノミー(文化的混乱状態)であり、この状態から彼らが自力で抜け出すことは困難であり、アメリカ社会は彼らの自滅を待っている観がある。ベローは今、彼らに最も必要なものは彼らを導いてくれる指導者、いわゆるグルの存在であると考え、この作品のなかでグルとして、「シカゴの道徳的イニシアティブの代表的人物」である、黒人の刑務所長のリドパス(Lidpath)と、殺人者で、自身ももと麻薬常習者であり、現在は私費で麻薬解毒センターを営み、いわゆる「ハル・ハウス」の様な場を黒人ゲットー社会に提供して



いるウインスロップ (Winthrop) という黒人を救済者として登場させている。

また、ペローは共産主義下のルーマニアのブカレストの監視され、自由の抑圧された社会の閉鎖性と黒人社会の閉鎖性をアナロジカルにとらえ、この状況を打破するためには、まずこの社会を解放すること、すなわちこの社会の実態と真実を暴露することが必要であると考え、この解放者の役割を果たすのが主人公のコルド (Corde) である。彼は黒人社会の実態を報告し、リドパスとウインスロップを擁護し、称賛する記事を『ハーパーズ』に書いたことでマスコミの「コルド狩り」に合い、学部長を勤めている大学当局からも圧力をかけられ、大学を辞職することになる。このことで彼は「アメリカ企業」のマスコミの実態と管理化された大学の現状を認識し、退職後はジャーナリストとして、この「ハーパーズ」の路線で自由に書き続け、「閉じられた社会」の真実を暴露していくことを決意する。そして物語の結末では内部的には二人の黒人指導者の存在と、自由を求めるコルドのペンの力の援助により、黒人社会の窮状に一条の光りが差し込んでいく。

ペローはこの作品を通して、前作で示されている自らの創作姿勢を明確に表明している。彼は自らの作家としての役割はアメリカ社会の真の状況を人々に伝えること、すなわち「閉じられた社会」を解放することであると考えていると思われる。すなわち70年代以降、保守化、さらに管理化の進むアメリカ社会において社会や組織の抑圧に決して屈することなく、自由に発言し真実を伝えることで「自由、平等、幸福の追及」という独立の理念の実現とアメリカの再生を希う「アメリカ人作家」としての役割を果たすことこそ、自らの創作活動の一つの意義であると認識しているのではなかろうか。この役割に関しては「都市作家」ペローはまさに適任である。というのも都市は現代文明社会の様々な問題を内包しているだけでなく、アメリカの様々な問題や矛盾の象徴的存在であり、都市を語ることはアメリカ社会全体を語ることでもあるからである。

これまでペローの第一作『宙ぶらりんの男』から第九作『学部長の12月』を通して、20年代から80年代のアメリカ社会を概観し、「社会の解放者」という彼の作家としての一つの役割と意義について論じてきたが、その過程のなかで、作家ペローの一つの独自性を明らかにすることができた。それは彼の社会にたいする鋭い観察力であり、また様々ではあるが一貫した、マージナル・マンとしての視座である。彼はユダヤ系移民として、知識人として、芸術家としてアメリカ社会を、特に閉じられた影の部分の鋭い目で見詰め、その内包する矛盾を暴露し、さらにその問題の解決の答えを見いだそうと努めている。またその表現と解決策にマージナル・マンとしての視座と知恵と認識を取り入れ、飽くことなく、コンスタントに創作活動を行ってきた。そして「社会の解放者」として作家ペローが最終的に到達したのがコルドのペンを持つ姿勢であり、彼の決意の表明はまさにペローの創作活動の理念の表明である。ここに我々はかつてアングロ・サクソンの伝統を理解できないとして作家への道を閉ざされたペローの「アメリカ人作家」としての確立を見ることが出来る。そして彼の創作活動はアメリカ社会の理想の実現に貢献するだけでなく、近年益々その価値が軽んじられつつある「文学」の持つ価値を我々に改めて認識させてくれる。

## (参考文献)

- Bellow, Saul. Dangling Man. New York: Vanguard Press, 1944  
 ————. Henderson the Rain King. New York: Viking, 1959.  
 ————. Herzog. New York: Viking, 1964.  
 ————. Humboldt's Gift. New York: Viking, 1975.  
 ————. Mr. Sammler's Planet. New York: Viking, 1970.  
 ————. Seize the Day. New York: Viking, 1956.  
 ————. The Adventures of Augie March. New York: Viking, 1953.  
 ————. The Dean's December. New York: Harper & Row., 1982.  
 ————. The victim. New York: Vanguard Press, 1947.
- Miller, Ruth. Saul Bellow : A Biography of the Imagination. New York: St. Martin's Press, 1991.
- 有賀貞他編 『アメリカ史 1』 山川出版社 1994年  
 ———— 『アメリカ史 2』 山川出版社 1993年
- 本田創造 『アメリカ黒人の歴史』 岩波書店 1991年